

## 姉貴の結婚

作: 岡崎ルツ子

演出: 小川政弘

### 登場人物

---

安藤伸也

真理子 伸也の姉

隆弘 伸也の父

芳子 伸也の母

池辺善三 真理子の婚約者

小林亮 伸也の友人

佐伯あずさ 伸也のガールフレンド

由美子 真理子の同僚

れい子 真理子の同僚

### <前編>

---

一目黒通りを走っているバイク。伸也と真理子が乗っている。

真理子 「ストップ、ここでいいわ。」

(ブロロ…、キキキキーバイク止まって)

真理子 「サンキュウ。あ、そうだ、伸也、お母さんに会議で遅くなるって、言っておいて。」

伸也 「うん、わかったよ。」

亮 「わっ。」

伸也 「何だよ、亮か。」

亮 「見たぞ、見たぞー。今のショートカットの美人誰よっ。」

伸也 「姉貴だよ。知らなかった？」

亮 「ああ、あれがそっかあ、外資系でキャリアの。足、長いよなあ。」

伸也 「何見てんだよ。講義おくれるぞ。乗れよ。」

亮 「女兄弟かあ…、いいなあ。女の人ってさ、なんかいい香りするじゃん、俺の部屋弟と一緒にだから、汗臭くて悲惨よ。」

伸也 「もっと優しけりゃいいけどな。」

亮 「何贅沢言ってるんだよ。美人だし、スタイルいいし、才女だし。」

伸也 「よく知らないやつはそう言う。あれ、すげー変わってるんだ。」

亮 「何が？」

伸也 「気が強くて、男みたいで、クリスチャンてんだから、あれで。」  
亮 「へー。」

N 俺は安藤伸也。大学3年。目黒に両親と姉と住んでいる。勉強はほどほど、バイトしたり、ツーリングしたりして、学生生活をエンジョイしている。唯一俺の人生に影響を落しているのが、姉の真理子の存在。もうすぐ30の大台に乗ろうというのに、結婚もせず、仕事だ教会だと飛び回っている。両親は古いタイプだから、娘の将来にやきもきしていて、とばっちりが俺まで来る始末なのだ。

芳子 「ねえ、伸也。あんた、真理子の教会行ったことあるでしょ。どうだった？」

伸也 「どうだったって？」

芳子 「真理子によさそうな若い男の人いた？」

伸也 「えー、いなかったなあ。たぶん。」

芳子 「でしょうよ、まったくあの子、どういうつもりかしら。」

隆弘 「何もそう騒がなくてもいいんじゃないか？」

芳子 「いいえ、来年は真理子も30。すぐに31、あっという間に40ですよ。お父さんが甘いから、あの子がつけあがるんです。今度はきっちり、お父さんから言ってもらいますからね。」

N そこへタイミング良く、姉の真理子が友人の結婚式から帰ってきた。

真理子 「アー、疲れた。すごいよ。親戚カラオケ大会までやっちゃって、今時都内の結婚式で4時間なんて信じられないわよねえ。」

芳子 「真理子、何です。結婚のけの字もないお前が人様の結婚式をとやかく言うなんて。」

真理子 「はいはい、どーも、すみません。」

隆弘 「お前、将来のこと、どう考えてるんだ。いつまでも一人でいるわけにはいかんだろうが。」

真理子 「もう、前にも言ったでしょ。私は神様を信じてる男性とでなければ結婚しません。祈っていれば、神様が与えてくださるんだから。」

芳子 「そう言って何年よ。あんたのいう神様の「みこころの人」なんてちっとも現れないじゃないの。弁護士さんやお医者さんなんかのいいお話は断っちゃうし、いったいどういうつもりなの。」

真理子 「お母さん、結婚はね、見かけや条件じゃないのよ。価値観が違っていたらだめに決まっているじゃない。もう、この話は終わり。何度議論しても同じですっ。」

N そう言うと姉は階段を駆け上がり、自分の部屋に閉じこもってしまった。

伸也 「あの一、お取り込み中すみませんが、夕ご飯は？」  
芳子 「勝手に食べてちょうだい。」  
伸也 「ちょっと一。」  
芳子 「知りませんっ。」

N これもとばっちりだ。姉貴、何とかしてくれよ一。

あずさ 「今日はほんとにありがと一。ネックレスもうれしかった一。時計もらったばかりなのにいいの？」  
伸也 「いいんだって。あずさ、プラチナの欲しいって言ってたろ。」  
あずさ 「うれし一、大事にするね。あ、電車、じゃあね一。」  
伸也 「また、電話するよ。」

N 佐伯あずさは一応俺の彼女。モデルクラブに所属していて、すごく可愛い。一緒に街を歩いていると、皆振り返るので俺もいい気分。

伸也 「あれ、160 円しかない。しゃーない、二駅歩くか。」

N デートの後はどうしても財布が軽くなるけど、可愛い子と付き合うのにお金がかかるのは仕方ない。とぼとぼ一時間ほど歩いて家についた。すると、門の前に見知らぬ男が立っていた。

伸也 「あ、うちに御用ですか？」  
善三 「い、いいえ。」

N そそくさと男は立ち去ってしまった。のっぽでメガネをかけた真面目そうな顔。ちょっとくたびれた背広、猫背の後ろ姿が頼りなげだった。

伸也 「何だろ。変なやつ。」

N それからたびたび、俺はその妙な男に遭遇した。通りのかど、近くのコンビニ、会うたび男は俺に会釈をし、何か悪いことをしたかのように逃げ出すのだ。そんなある日、大学の帰りに姉の姿を見つけた俺はギョツとした。あのメガネ男が姉の後をつけるように歩いているではないか。

伸也 「姉貴、こいよ。」  
真理子 「やだ、伸也じゃない、何よ、ちょ、ちょつと。」

N 俺は姉の手を引っ張って走って家に帰った。急いで2階の窓を開けた。

伸也 「いたっ。あいつだ。」

N 電信柱の影にメガネ男が、しょんぼりという感じで立っているのが見えた。

真理子 「何よ、どうしたの？」  
伸也 「姉貴、あの男につけられてたぞ。やばいよ、ストーカーじゃないの。」  
真理子 「いいのよ。」  
伸也 「いいのよって、よくないよ。俺、追っ払ってやるから。」  
真理子 「いいんだってば、知ってるの。」  
伸也 「へっ？」  
真理子 「知ってる人なの。池辺善三さん。」  
伸也 「その、ゼンゾーさんてのが、何で姉貴をつけてんだよ。」  
真理子 「つけてるわけじゃないの。あんたには言ってなかったけどね。」  
伸也 「何が？」  
真理子 「結婚申し込まれてるの、あの人に。」  
伸也 「はあ——？？？？」  
亮 「で、そのさえない男と美人の姉さんが付き合ってるってわけか。」  
伸也 「そ。母親なんて狂喜乱舞よ。でもさ、姉貴、あの年まで男っ気なかったからさ、心配で。」

亮 「どこが良かったんだろ、そのメガネの。」  
伸也 「だろー、何か始めは牧師さんに紹介されたんだって。どうもピンと来なくてやんわり断ったらいいんだけど、次の日会社に訪ねてきたんだってさ。。」

由美子 「ちょっと、あの人また来てる。真理子さんに挨拶してるわよ。」  
れい子 「すごいわね。毎日毎日。」(くすくす笑う)  
真理子 「関係ないの。ただの知り合いなんだから。」  
由美子 「少しは優しくしてあげたら？ほらこっち見てる。」  
れい子 「やあだー。」「こわーい。」(ふたりげらげら笑う)  
伸也 「始めは職場に顔出さただけだったんだけど、そのうち毎日家まで送ってくれるようになったんだ。ところが、帰り道の間中、善三さんはずーっと黙りこくったまんまなんだって。姉貴はすっかりいやんなちゃったんだな。」

真理子 「そんなに毎日送って下さらなくていいんです。」  
善三 「いえ、あ、あの帰り道ですから・・・。」  
真理子 「帰り道って、池辺さんの会社、確か品川でしたよね。丸の内まで遠いじゃないですか。」  
善三 「い、いえ、大したこと、ないです。・・・」  
真理子 「あの、申し訳ないんですけど。もう、これきりにしましょう。」  
善三 「えっ・・・。」  
真理子 「私、池辺さんと結婚してうまくやっていく自信ないんです。お気持ちはありがたいんですけど・・・あらっ？池辺さん・・・どこ？」  
伸也 「善三さん、姉貴の言葉に相当ショックを受けたんだな。後ろの方でそのまま固まってたらしいんだ。」  
亮 「それで可愛そうになって、オーケーしたってわけか。」  
伸也 「うん。この人は私がいなくちゃだめなんだって思ったらしいんだ。それって愛情じゃない、同情だろって言ったんだけどね。」  
亮 「女心はわかんねー。あ、おい、あれ、あずさちゃんじゃねーの？」  
N 見ると、通りの向こうであずさが、見慣れぬRVに乗り込むところだった。ハンドルを握っているのは・・・あ、あいつ、法学部の富永だ。  
伸也 「うそだろー。」  
N 俺の悲痛な叫びも空しく、あずさを乗せてRVは走り去ってしまった。

## <後編>

---

亮 「お、おい、あれ、あずさちゃんじゃねえの？」  
伸也 「うそだろーっ。」  
N 俺の彼女の佐伯あずさが、法学部の富永の運転するRVに乗り込んだのを、俺は確かにこの目で見た。俺は安藤伸也。大学3年。クリスチャンじゃないと結婚しないと宣言して、両親をやきもきさせてた29歳の姉真理子に、やっと池辺善三というお相手が見つかった。ところが、今度は俺が危機一髪。なんであずさが、気軽に富永なんかの車に乗るんだ？  
あずさ 「乗ったわよ。富永君の車に。いけない？」  
伸也 「いけないって・・・ふたりきりで・・・？」

あずさ 「そうよ、御台場一周したの、楽しかった。イタリアンごちそうになっちゃった。今度伊豆にも誘われたの。別荘持ってるんですって、富永君ち。」

伸也 「なんだよ、それ。」

あずさ 「あ、もしかして焼きもち？別に、伸也がきらいになったわけじゃないのよ。伸也、カッコイイし、優しいし。」

伸也 「ふざけんな、何、ハカリにかけてんだよ。」

あずさ 「何よ、バッカみたい。」

N いったい俺は、あいつの何を見ていたんだ。可愛いあずさの顔を思い出すと、悔しかった。めっちゃめっちゃバイクで飛ばしていたら、いつのまにか多摩川の土手に出ていた。芝生の上に寝転ぶと、桜の枝が真上に見えた。つぼみが膨らみかけている。と、男が俺の顔を覗きこんだ。

善三 「こんな所に寝てると、風邪ひきますよ。」

N 顔は逆さまだが、それは池辺善三さんののんびりしたメガネ顔だった。俺はあわてて起き上がった。

善三 「伸也君、何してるんですか？」

伸也 「昼寝ですよ。善三さんこそ、何してるんですか。」

善三 「はあ、真理子さんを送ってきた帰りです。お花見しようかと思ったんですが、桜まだ早いですね。」

N 心は桜満開って感じの幸せそうな善三さんを見ていたら、ふと聞きたくなった。

伸也 「善三さん、姉貴のどこがいいんですか？あんながさつな女。」

善三 「と、とんでもない。真理子さんは明るくて、きれいで、知的で素晴らしい女性です。」

伸也(モノ) 「あばたもえくぼってか。ものは言い様だよな。」

善三 「神様が私に、真理子さんを結婚相手として与えて下さったなんて、ほんと、信じられない。感謝です。」

伸也 「与えて下さった？」

善三 「はい、私たちクリスチャンは、結婚を神様からの祝福と思っています。相手の方は神様が自分に与えて下さった、特別の人なんです。」

伸也 「だから、少々欠点は目をつぶると・・・。」

善三 「というか、足りないところは補い合うのが結婚じゃないでしょうか。私なんか、この

通りさえない男だし…、バレンタインデーだって、一度もチョコもらったことがないんです、私。」

伸也 「はあ…。」

善三 「でも毎年一抹の望みを抱いて、2月14日にはどんなに熱があっても、這ってでも学校にいったもんです。なのに一度も、一度もですよ、チョコもらえなかったもんなあ…。伸也君みたいなハンサムには、この気持ちわかんないでしょうねえ…。それが、こんな私と…。」

N 顔をくしゃくしゃにして笑っている善三さんを見ていたら、ああ、なんか今時珍しい、いい人だなと思えてきた。

善三 「こんな私が、真理子さんのために何ができるか考えると、ただ神様に助けを祈るばかりです…。」

N 好きな人のために自分が何ができるか。そんな風に考えたことって今まで俺にあったらうか。

真理子 「ただいま。」

伸也 「お帰り。」

真理子 「あら、休みなのにあんたうちにいたの？」

伸也 「いいだろ、別に。」

真理子 「このごろ、彼女、なんて言ったっけ、電話ないのね。」

伸也 「ああ、あずさ？関係ないんだ、もう。」

真理子 「そうだったの。…元気だしなさい。だいたい伸也には似合わないわよ、あの子。」

伸也 「どうということ？」

真理子 「聖書にね、『人はうわべを見るが神は心を見る』って書いてあるの。あんまり見かけにとらわれちゃだめなのよ。」

伸也 「うるせえな。姉貴こそうまくいったんのか？善三さんと。」

真理子 「うーんまあね。、いい人なんだけど、なんかはっきりしないっていうか、男らしくないっていうか…。」

伸也 「姉貴にはもったいないよ、善三さんは。」(階段駆け上がる)

真理子 「えっ？何よ、それ、どういう意味よ。伸也、伸也ったら…もう。」

N 姉貴が文字通り春真っ只中、俺が灰色の冬の日々を送っていたそんな屋下がりのことだった。俺が大学から帰ると、両親が話し合っているのが聞えた。

隆弘 「そんな急に、あの話はなかったことにするって、どういうことだ。」

芳子 「池辺さんがね、牧師さんになる学校に行くために、お仕事やめるんですって。結婚は当分できそうにないからって、池辺さんの方からお断りのお話があったのよ。」

隆弘 「真理子は？真理子の方はどうなんだ？」

芳子 「あの子もそれでいいって。かえってよかったんですよ。収入がないうえに、これから何年も勉強するっていうんじゃ、真理子がかわいそうですよ。」

伸也 「それ、ほんと。」

N 俺は、思わず口を挟んでいた。

芳子 「伸也、あんた聞いてたの。」

伸也 「善三さんが結婚をやめるなんて、そんな。俺、確かめてくる。」

芳子 「ちょっと、伸也、余計なことするんじゃないのよ。」

N 俺が家に戻ったときは、もう3時を回っていた。

真理子 「伸也。」

伸也 「何だよ。」

真理子 「あんた、善三さんのアパートに行ったんでしょ。」

伸也 「行ったよ。だから何。」

真理子 「あの人、何て？」

伸也 「姉貴にはもう関係ないだろ。」

真理子 「善三さん、結婚やめた本当のわけ、私には話してくれないの。お願い、教えて。あの人なんて？」

伸也 「…俺がアパート行ったとき、もう善三さん、荷作りしていたんだ。」

伸也 「あんなに喜んでいたのに、どうして急に結婚とりやめるんですか？姉貴のこと、嫌いになったんですか？」

善三 「嫌いだなんて、そんな。あんな人が私の妻になってくれたら、どんなに幸せだろうと…。」

伸也 「じゃあ、どうして？」

善三 「結婚は、私にとって、なんて言うか、大きな人生の転機です。その転機に自分をもう一度見つめ直したときに、本当にしたいこと、願っていることが、見えてきたんです。牧師になりたいと。牧師になって、救い主イエス・キリストのことを伝えたいと、思ったんです。」

伸也 「姉貴が一緒じゃ、だめなんですか？」



善三 「いいえ…そうじゃないんです。神様の助けがあるとはいえ、牧師にはいろんな苦  
労があります。経済的にだって、精神的にだって…。私はいいんです。自分が選  
んだ道ですから。でも、真理子さんにまで大変な思いをさせるなんて…私には、と  
ても…。」

真理子 「そう、あの人、そう言ったの。」

N すっと立ち上がった姉貴の顔は心なしか少し青ざめていたが、大きな瞳を輝かせ  
て、なんだかすごくきれいだった。

真理子 「伸也、善三さん、何時に出発するっていった？」

伸也 「え、た、たしか4時にトラックが来るって…。」

真理子 「4時!?時間がない、伸也、バイク出して。」

伸也 「えっ？」

真理子 「早く。急いで。」

伸也 「お、おい、姉貴、ヘルメット。」

N 俺は姉貴を後ろに乗せて、バイクを走らせた。空は晴れ、多摩川べりは桜が満開  
だった。

真理子 「…あんたに何も言う資格ない、私。」

伸也 「え、何、聞えない。」

真理子 「見かけに捕らわれてたのは、私だった。善三さんの心をわからない、お馬鹿さん  
は私だった。…伸也、私結婚するわ、善三さんと。神様が私に与えて下さった人だ  
って、やっとわかったの。あの人にそう言うわ。」

伸也 「うん、そうだよ、言ってやれよ。」

真理子 「あの人が無文でも、ハンサムじゃなくても、平気よ。私結婚する。」

伸也 「うん、がんばれ、がんばれよ、姉貴。」

N あんな私の強い姉貴を愛して、だからこそ身を引こうとした善三さん。そんなあの  
人に苦労を承知でついていく決心をした姉貴。そんな二人が、なんだか無性にカ  
ッコ良くて眩しかった。風に吹かれた桜の花びらが、バイクの俺たちの顔に降り注  
ぐ。突きぬける桜並木が、姉貴のための花道のような。

伸也(モノ) 「クリスチャンの結婚って、意外といいじゃん。」

N 心の中でそうつぶやくと、俺は右手に力を入れ、スロットルを目いっぱい回した。

<完>

---